

A Reconsideration of Regional Identity: A Case Study of the Oku-Noto Region, Ishikawa Prefecture, Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47141

地域らしさの再考－奥能登地域を事例として－

嘉瀬井恵子^{1*}

2016年9月21日受付, Received 21 September 2016

2016年12月21日受理, Accepted 21 December 2016

A Reconsideration of Regional Identity - A Case Study of the Oku-Noto Region, Ishikawa Prefecture, Japan

Keiko KASEI^{1*}

Abstract

This research investigates the issue of identity in a region of Japan. Its central focus is on examining the regional identity of residents in the very rural Oku-Noto region of Ishikawa Prefecture in Japan. The method of examination involved surveying and interviewing local residents. In recent years, Noto, has been attracting attention because it has been officially certified and recognized for its “Globally Important Agricultural Heritage Systems” (GIAHS). However people living in Oku-Noto complain that there is nothing there. They say that life is mundane and ‘*jimi*’ (meaning plain and uninteresting). However, as features such as GIAHS suggest, it is wrong to say that there is nothing there. I use “*Ryo-kai*” as a guiding philosophy in this research. The meaning of “*Ryo-kai*” is different from the usual meaning of the term i.e. “understanding” that is often used in Japanese. Here it refers to what underlies the acceptance of living a ‘*jimi*’ and ordinary life on a daily basis, and how this shapes a sense of regional identity. In particular, it emphasizes not only one’s individual awareness but also one’s consciousness as being part of a community.

Key Words: regional identity, interview survey, Noto’s Globally Important Agricultural Heritage Systems, *Ryo-kai* (sincerely consent), ordinary life

キーワード：地域らしさ、聞き取り調査、能登世界農業遺産、諒解、日ごろのこと

I. はじめに

近年、地域づくりの策定や課題への取り組みについては、地域固有の文脈で捉える方向になってきている。特に2011年の東日本大震災後には、失われた風景やそれに基づく記憶といった、自己に内在する可感的な意識も地域づくりに活かすべきだとの声も多く聞かれている¹⁾。しかしながら日本の地方の大

部分では山を削り、田圃を枯らした結果、地域独自の性格が弱まり、均質化した様相を呈しているのが現状である。

そこで本稿では、地域本来の姿を知るべく、「地域らしさ」とは何たるかを探ることを目的とする。その上で現代における地域社会の「らしさ」の再構築を検討するものである。

¹ 金沢大学地域連携推進センター能登学舎 〒927-1462 石川県珠洲市三崎町小泊33-7 金沢大学能登学舎 (Center for Regional Collaboration, Kanazawa University, 33-7, Kodomari, Misaki-cho, Suzu, 927-1462 Japan)

*連絡著者 (Author for correspondence)

Ⅱ. 方 法

1) 調査地と対象者

調査地は、石川県能登半島の北部に位置する奥能登地域を選定した。奥能登は珠洲市、輪島市、能登町、穴水町の2市2町からなり、古来より農林水産業、食文化、祭礼などが盛んな地域である。特に平地の少ない地理的条件から、傾斜地を利用した棚田と灌漑用のため池による稲作が営まれてきた。だが、日本海沿岸の青潮の存在は、この地域に高水温をもたらし、稲作形成に影響を与えている。

2001年4月穴水町以北の鉄道が廃線となり、現在、能登半島最奥部の珠洲市の人口は大正期よりも少ない。2007年3月には穴水町、輪島市を中心に最大震度6強を観測する能登半島地震を経験した。

その一方、2011年6月、中国北京で開催された世界農業遺産（GIAHS）国際フォーラムにおいて、奥能登を含む能登地域の伝承や里山里海の景観、独自の伝統が評価され、先進国で初めて新潟県佐渡市とともに世界農業遺産に認定された²⁾。奥能登地域としても深刻な過疎高齢問題を前に、かつての里山里海の面影に手をこまねいているわけにはいなくなった。改めて「地域らしさ」への挑戦を胎動させつつ時が来たのである。

2) 調査方法

本稿では、奥能登地域に暮らす人々（以下「居住者」と記す）の語りから、自己の思考あるいは行動を生み出す心性が、どのように「地域らしさ」として培われたのかを把握する。そこで、当該地域の居住年数が長く、再帰的に地域を語ることが可能な40代～60代を調査対象とした。

一人称で語られる経験は、地域社会に普遍的に存在する慣習や作法を自覚した一人の自己を成立させると考えられる。さりとて、自己の語りは抽象的に過ぎると懸念する向きもあろう。だが、自己の経験は現実そのものであり、内省的な語りは実に多くの地域の課題や問題を提示してくれる。故に、人々の心性に潜む懸念や思いを把握することによって「地域らしさ」の特徴や多様な可能性を読み解く本稿の目的に合致している。

Ⅲ. 「地域らしさ」とは何か

近年、自治体による景観条例や景観基本計画では、その基本理念として「地域らしさ」が掲げられる傾向にある³⁾。しかし、「地域らしさ」の何たるかが明記されることはない。

では一体、「地域らしさ」とは何か。この問いに対して桑子（2016）は、地域空間の価値を見出すことだと言う。この桑子の整理に基づけば、「地域らしさ」とは居住者の生活や慣習、あるいは地域の空間に蓄積された歴史といった人間的営為の型と捉えて良いであろう。例えば、自地域の伝統芸能や年中行事といった地域の象徴シンボルに接すると、無意識のうちにも地域と自己の内省的意識とが深く連関し合うことで、我がまちらしいと誇りに思ったり、また、一層の帰属意識を持つことがある。このような内省的な心の習性について、フランス人政治学者トクヴィル（2008）は、モレスの概念を打ち出した。トクヴィルは、モレスを本来の風習の意味に適用させるだけでなく、人間の持つ様々な観念や人々の間で流通する種々の意見、そして精神の習慣を形づくるもろもろの考えの総体に適用すると説明する。そして、人びとの心の習慣が織りなす社会を展望する⁴⁾。

そこで、モレスと社会との関係性について、奥能登の労働体系で説明したい。奥能登における半農半漁の兼業形態については既に武田ほか（2013）の論考があるが、他にも農業と漁業以外の就業を行う半農半X（塩見、2003）や、複数の就業を兼ねる暮らしぶりがある⁵⁾。都市の物差しで豊かさを図ろうとする世の命題は、半農半Xの現状や、担い手不足の高齢地域について、何もない地域であるとみなし、さらに次節で見るように居住者自身さえもそう自認する⁶⁾。しかし、結城（2009）が指摘するように、時に半農半Xは貧しさの象徴と思われるが決してそうではない。自己のモレスがひとところだけに留まるような社会ではなく、むしろ農林漁業やその他の多様な世界と自己の心性がいかに関われるのかが「地域らしさ」につながろう。それについてはⅣの3)でみていく。

Ⅳ. 「奥能登らしさ」の解明

では奥能登の「地域らしさ」とは何か。本節では

聞き取り調査で得られた知見を元に、「奥能登らしさ」を解明したい。

1) 「日ごろのこと」と「地味」

山地の多い奥能登では平地部は点在するほどであり、多くは入り組んだ谷あいには田圃が存在している。故に「山がちなどころでは機械化が難しいところがあり、機械より人にお金をかけたいと思ってきました。」⁷⁾と語る農家は多い。珠洲市吉ヶ池で代々、農業を営む男性も、「でっかい機械は入らないし、トラクターだって入らない」⁸⁾と説明する。

では、彼らは農業を糧とする生活についてはどう捉えているのだろうか。上記の吉ヶ池の男性は「全然格好つけてない。・・・なんも気取っていないです。」言う。また、輪島市町野町金蔵集落に長年住む男性は、「田圃とため池、地域に根付いていること。何もない。地味です。(下線筆者。以下同じ)」⁹⁾と述べる。狭く陽当たりの悪い山間の田圃の風景は、さながら何もなく「地味」に思えよう。しかしながら、地域の良さについてこの男性は「日ごろのこと」だと言い切る。そしてさらに輪島市小池町の農家の男性は、日常の生活について「平日はバス会社で働き、週末は田圃に出ます。朝食を食べる前に田圃に行きます。その時、田圃の草が伸びていれば草を刈って、お腹がすいたら家に戻って朝ごはんを食べて田圃に行きます。稲を刈ります。その繰り返しです。もう、いい歳になりました。」¹⁰⁾と言う。ほとんどの農家が朝食前の時間を使い、これらの作業を行う。このような作業を朝前仕事という。この男性の朝前仕事は即席の行為によるものの、偶然になしたわけでも分析的行為でもない。しかし深層深部に潜在化、無意識化された居住者の経験としての行為は、草を刈るという手段だけでは言い尽くせない内在的価値がある。しかも極めて当たり前の感覚で始まる農作業は容易ではない。そのことを哲学者和辻(1935)は、「日本の農業の核心をなすものは『草取り』である。雑草の駆除である。これを怠れば耕地はたちまち荒蕪地に変化する。」と至妙に描く。さらに、雑草との戦いを怠ることは「ほとんど農業労働の放擲に等しい」と和辻は断言する。先の輪島市小池町の農家の男性には、数キロ先の距離にある海辺でくつろいだ記憶はない。「海には行きません、疲れるでえ。」と答える生活には、放擲に等しい雑草との戦いがあ

る。農業生活とは、「田植えのとき、草取りのとき、稲刈りのとき、村のくらしには、逃してはいけないときがたえずやってくる」(内山, 2006)ように、漫然とした日々ではない。

しかし、居住者にとって日常的に「慣れ親しんだ風景は、慣習化され、身体化され(桑子, 2016)」ていく「日ごろのこと」である点に今一度、着目したい。例えば、居住者は自分たちについて「気取っていない、大げさに着飾らない。」¹¹⁾との感覚を持つだけに、能登世界農業遺産に認定されても、得てしてそれへの思いは少ない。例えば、「世界農業遺産に認定を受けました。正直、普通の作業、米作りをしていく中で世界農業遺産はピンと来なかった。」¹²⁾や、「世界農業遺産については認定されたけれど何？実感が沸かないです。老人が動いているのが世界農業遺産なら、担い手がいないと世界農業遺産どころではない。」¹³⁾また、「(認定されても)変化はない、恩恵は受けていない。」¹⁴⁾といった発言にそれが表れている。地域に暮らすという「普通の」感覚が、余りにも彼らの内省的意識を構成しているのである。

要するに「地域らしさ」は、認定やモノといった可視できるものに限らない。人々の内在的意識とも関わりを持つ。故に「地味」とは、「何もない」地域の姿を憂うことではない。次から「諒解」という心性を分析軸として見ていくのは、このような地味こそが奥能登の「らしさ」を作ると思うからである。

2) 「心性」の根拠としての「諒解」

哲学者内山(2006)は、理解することと諒解することは違うという。内山に言わせれば、「理解のためには、仕組みや道筋の認識が必要になる。例えば自然の仕組みを認識して、私たちが自然とは何かを理解するようにである。ところが諒解のためには、必ずしも仕組みや道筋の認識は必要ではない。自然の仕組みはわからなくても、人間もまた自然とともに生きているのだと諒解することはできる。」のである。そして、「農民は土の中の栄養素や微生物の働きを理解していなかったけれど、豊かな作物を育てることを知っていた。農業のあり方を諒解していた。」という。つまり、農民は合理的に理解することが出来るより、多くのことを有しているのである。居住者が言う「日ごろのこと」は、合理的な行動ではなく、

諒解された世界を軸にしている。前節でみたように、地味と捉えられる地域の暮らしの中にも、居住者には自地域に対する心の諒解がある。例えば、生産性が算定できるもののみを予測し、農作物を大量生産することは望まない。それは奥能登で300年以上続く棚田での稲作文化や、農家が田の神様に1年の豊作を祈り、収穫に感謝する年中儀礼であるアエノコトが未だ農業神事の原型として継承されていることが好個の例である。それでも一心に田の神様に祈り、自然に任せる昔日の地域の人々の姿は、「ごくあたり前なんやけど、絵になる。」¹⁵⁾つまり、居住者が奥能登らしいとする根拠とは、そのような心性にある諒解である。

3) 「らしい」と思う心性は、果たして共有しうるか

居住者が自地域をどのように諒解しているのか、その心性を実際の発話とともにみてきた。では、そのような心性は、己である個に埋没しているのかというと決してそうではない。田圃や畑は地域の風景であり、数世代を通じた象徴である。居住者は生活習慣から編み出される知、伝統行事や祭りを地域資源として守ってきた。そのような居住者は、例えば、奥能登の伝統的な祭りに接する時、あるいは皆が地域の象徴と見るものを自分も見ると時、地域で神事を大事に思う時など、奥能登らしさという一つの真理に、共同体としての独自の価値意識が潜んでいることを無意識のうちに居住者は諒解している。つまり、自己諒解であると同時に、他者をも諒解しているのだ。

その上で出発点となるのが、自己諒解は地域の他者との間で共有しうるかという関係性の問題である。地域の影響を受けながら自己を諒解していくものであるならば、その根拠として考えられるのが「地味」や「日ごろのこと」である。確かに地域は過疎高齢化した。だが、地域空間の生成と組織化の原理として、「諒解」はある。そして、その原理こそが、地域を地域たらしめるものである。奥能登の「地域らしさ」を作るのは、「諒解」の中にある超越的な共通性、普遍性によって成立する関係性の世界である。この関係では己は己、神は神、田圃は田圃というような各各に居る間柄ではなく、相互に絶えず折り合っている。折り合うとの考え方は、個人のモレスが関係性の中でリアリティーを共有し、共通の枠組みを作

り出すことを意味する。要するに「地域らしさ」とは、自己諒解の場であると同時に公共空間と一致する。「地域らしさ」には生活様式として受け継ぐべきことが残存調和し、善悪の理屈で動かない日常を潜在的に含んでいる。そのことを居住者は諒解している。この点で「地域らしさ」とは公共的「個」の集合体であり、一定の自律性を共有するのである。

V. おわりに

－「地域らしさ」の、現代的意義への修正－

まとめとして、「地域らしさ」を現代における意義として再構築してみたい。

強調したいのは、居住者が奥能登の将来像を描くのも、地域内部から出現する諒解の世界だという点である。だからこそ、ここで「地域らしさ」が生む地域の未来予想についても若干の記載をしたい。

本調査地のような過疎高齢化した地域では、もはや過去の経験に基づいた一種の実践的仮説に留まっただけではいられない。移住・定住者の確保や、担い手不足の解消といった課題が厳しさをもって臨んできている。したがって、我々が修正すべき「らしさ」は、健全な地域の営みの象徴である「地味」や「日ごろのこと」が、魅力が何もないかのごとく不正確に受け取られていくことである。これまで見てきたように、「らしさ」とは持続的に居住者の感覚や思考や行動を方向づけ、そして身体化する現在の同一性のことである。無意識のうちにも誇りに思うものこそが、世界農業遺産である。そして、「日ごろのこと」こそが、農業システムとして評価された世界農業遺産なのである。

「地域らしさ」とは、時代に応じて変容していくが、変容しながら創生し、どこか同一性を失わず、公共的傾向を備えている。つまり、ある特定地域の生活様式となっていく際の創生と不変の両義性を備えているものが地域である。「何もない」とは「語りえないもの」という地域の限界を指すものではない。「何もない」という奥能登らしさは、諒解が内包するダイナミズムによって変容していくのである。これについては、次の機会でも地域に暮らす人々の営みを踏まえた「らしさ」の構想力を中心に論じることとする。

注

- ¹⁾ 例えば、2012年3月1日付朝日新聞（朝刊）「防潮堤、住民合意の壁「安全第一」「景観守りたい」被災3県で復旧着工1割」の記事によれば、2011年3月11日の東日本大震災で被災した石巻市雄勝湾の防潮堤と大原川の河川堤防の整備に向けた議論の際、市が提示した防潮堤の高さに対し、住民からの「港町の景観が失われ、観光もダメになる」との反対の声を掲載している。
- ²⁾ 世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems: GIAHS）とは、社会や環境に適応しながら何世紀にもわたり発達し、形づくられてきた農業上の土地利用、伝統的な農業とそれに関わって育まれた文化、景観、生物多様性に富んだ、世界的に重要な地域を次世代へ継承することを目的として2002年に国連食糧農業機関が創設した制度である。
- ³⁾ 例えば、北海道富良野市の「富良野らしさの自然環境を守る条例（1990年12月）」では、第1条で「富良野らしさの自然環境と自然景観を守るため基本となる事項を定めることを目的とする」と制定している。このように神奈川県川崎市の「川崎市都市景観条例（1994年12月）」、神奈川県茅ヶ崎市の「茅ヶ崎市景観計画」など、多くの自治体が制定している。
- ⁴⁾ トクヴィル（1987）は「人々が互いに似かよった信仰をもっていないで繁栄することのできる社会は存在しない。というよりはむしろ、人々の間にそのような信仰がなくて存続する社会というものはない。なぜかという、共通の観念なくして共通の行動はないし、また共通の行動なくして、人間は存在しても社会は存在することはないからである。それ故に社会が存在するためには、ましてこの社会が繁栄するためには、市民たちのすべての精神が、幾つかの主要観念によって結集し団結していなければならない。そしてこれは、市民たちのひとりひとりが、時として自らの意見を同一の源泉から汲みとり、そして全くつくられている幾つかの信仰内容をうけいれることを承認するようになっていなければ、ありえないことである（筆者下線）」と述べる。
- ⁵⁾ ここで詳細に説明することは適わないが、半農半Xの就業では、半農半林、半漁半林等がある。また多就業のスタイルとしては農業や林業、サービス業を曜日ごとに、あるいは時間ごと、季節ごとに就業する暮らしぶりがある。

る。

- ⁶⁾ 結城（2009）は、宮城県北上町を調査した際にも、半農半漁の町が「ときに貧しさの象徴のように思い、思われていた」と描写している。この点について筆者が千葉県三番瀬で調査した際も、専業漁業者である船橋市の漁業関係者が、隣接する市川市の半農半漁の漁業関係者に対して「磯付き百姓」と呼んでいた（2008年7月10日聞き取り：千葉県船橋市の70代男性）。
- ⁷⁾ 2016年9月26日聞き取り（珠洲市飯田町在住の40代男性）。
- ⁸⁾ 2016年6月18日聞き取り（珠洲市若山町の吉ヶ池の40代の男性）。
- ⁹⁾ 2016年5月16日聞き取り（輪島市町野町金蔵の60代男性）。
- ¹⁰⁾ 2016年7月10日聞き取り（輪島市小池町の60代男性）。
- ¹¹⁾ 注8の農業を営む男性の発話であるが、この男性のように農業を生業にしている住民だけではなく、旅館の女将も同様に述べる（2016年10月22日聞き取り：珠洲市若山町飯田の60代女性）。
- ¹²⁾ 2016年5月16日聞き取り（輪島市白米の60代男性）。
- ¹³⁾ 2016年5月16日聞き取り（輪島市町野町金蔵の60代男性）。
- ¹⁴⁾ 2016年10月24日聞き取り（珠洲市飯田町の40代男性）。
- ¹⁵⁾ 2016年8月28日聞き取り（能登町柳田の40代男性）。

文 献

- 内山 節, 2006: 戦争という仕事. 信濃毎日新聞社, 長野, 334p.
- 桑子敏雄, 2016: わがまち再生プロジェクト. 角川書店, 東京, 255p.
- 塩見直紀, 2003: 半農半Xという生き方. ソニーマガジンズ, 東京, 230p.
- 武田公子・横山壽一・久保美由紀・小柴有理江・神崎淳子, 2013: 過疎集落の生活実態にみる政策課題: 珠洲市内三集落調査より. 日本海域研究, 44, 71-93.
- トクヴィル・アレクシ・ド, 1987: 井伊玄太郎訳, アメリカの民主政治・下. 講談社, 東京, 613p.
- トクヴィル・アレクシ・ド, 2008: 松本礼二訳, アメリカのデモクラシー第1巻下. 岩波文庫, 東京, 480p.
- 結城登美雄, 2009: 地元学からの出発. 農山漁村文化協会, 東京, 308p.
- 和辻哲郎, 1935: 風土 人間学的考察. 岩波書店, 東京, 299p.